

★漢方あれこれ★

◆金元四大家についてI◆

太田 順康

李 東垣 脾胃論を唱えた「温補派」

李杲（1180～1251）南宋の頃金の領内の河北省真定の人、晩年東垣と号した。当時医業として有名な張元素に師事し、その業を伝授された。

彼の家は代々資産家で裕福であったので、医を業とはしなかったが、名医として広く知られていて、緊急の時のみ、人びとは診察をお願いしました。

得意は傷寒（急性熱性病）癰疽、眼目病などで、薬の効能や働きを重視してし、少量づつ多くの生薬を使って処方しました。

当時の社会環境が不安で、精神的な刺激（ストレス）・飲食の不摂生・生活の不規則・寒暖の不調などによって起こされる病気が多く見られました。彼は傷寒の治療のように外邪を追い出す治療では治らないことに気づき、身体の中、特に脾胃（胃腸）を丈夫にして、外邪に抵抗出来る身体にする必要があると、「脾胃論」を唱え病気の治療には脾と胃の気を補い、元気を益す事が大事だと補剤を多く用いました。

代表的な処方ではNo.4 1補中益気湯です。この薬はその名の通り、中（胃腸）を補い元気を益す薬で、現在も良く使われています。

著書には「内外傷弁惑論」「脾胃論」「蘭室秘蔵」などが現在に伝わっています。

朱 丹溪 養陰派・滋陰派を創成した。

字名は彦修、(1281年～1358年) 頃の人、今の浙江省義島の丹溪に住んでいたので丹溪先生と呼ばれました。

「和剂局方」を学ぶうちに「素問、難経」を研究する必要性を感じ、羅知悌に師事し劉完素、張元素、李東垣などの著書に接し研究を始めました。

病気の人は陽気は常に有り余っているが、陰気は常に不足している。陽気を追いつめるのではなく身体の中の陰気を補い、陽気の有余から来る火を降ろすことが大切と、滋陰降火の説を唱えました。

著書には「局方發揮」「本草衍義補遺」などがあります。

病気を治療するのに外邪を直接攻撃するのではなく、内の守りを固める事により外邪に抵抗する医療を提唱する李東垣と朱丹溪は、**李朱医学**と云われるようになりました。 ↗



すこやか教室 山歩き

曜日と時間：毎週金曜日 10:30～

☆雨のときは、中止します。

☆お茶など飲み物を持参

<12月の予定>

山間の紅葉とともに、オシドリやカモたちが松尾池に戻って来ました。池の水位が下げられてちょっと不安そう、深いところに集まっています。自然と鳥たちに魅せられて訪れる我々は、その音・声に耳を澄まし、岩をつたう滴に時を感じます。年の瀬の12月、この一年を語りつつ歩きましょう。

4日(金) 11日(金) 18日(金) 25日(金)

§ 漢方相談日

(担当 太田順康：日本漢方交流会認定漢方終身師範、岐阜県漢方研究会会長、岐阜薬科大学「漢方学」講師) 今月の漢方相談日は、下記のように。

7日(月) 14日(月) 24日(木)

§ 12月の休診日

28日(月) 29日(火) 31日(木)

☆たばこをやめて、健康な体を



スモーカーライザーで肺の空気を検査

室町時代に明に留学した田代三喜が、この**李朱医学**を学び、さらに曲直瀬道三に受け継がれ、江戸時代までこれが日本の漢方の主流になっていました。

後に傷寒論・金匱要略を中心に医療をした吉益東洞などの古方派に対して、後世派と呼ばれるようになったのです。

食事や生活の不摂生が元で糖尿病や高血圧、肥満、心臓病などを多発している現代にこの**李朱医学**は効果を発揮するように思います。

(つづく)